

感性を育む道德の授業

—第3学年「心にひびく思いやり」の実践を通して—

1 豊かな感性を育む道德の授業

道德の時間は、道德的な価値を教え込む時間ではない。なぜなら、子どもたちは小さいときから、場に応じた行動の仕方、してはいけないこと、人への接し方等を家庭で、幼稚園・保育所で、すでに幾度となく聞かされてきているからである。以前に、副読本資料を用い、資料を黙読させたあと、「このお話は、わたしたちにどんなことを教えようとしているのか」をノートへ記述させたところ、ほとんどの子がその資料の価値とすることを記していた。「～しちゃいけない。」「～する方がいい。」、そんなことはわかっているのである。それだけに、「わかっているけれど、なぜそのような行動ができないのか。そうするのか。」「こんなとき、自分ならどうするのか。」（発問ではなく、自分自身への問いとして）といったような自分自身を見つめ、ふりかえる時間であるとの認識から、道德の授業をとらえている。そのためには、構えず、素直な自分を出せる雰囲気づくりが大切である。

「またか。」とか、「ああ、今日はこういうことを答えればいいんだな。」と思われる学習展開では、自分のこととして感じ、考えるよりも、「どう答えたらいいか」、「どう表現したらいいか」といった『知』の部分が強くはたらいた授業になる。ひとりひとりが自分のこととして、しっかり感じ、考える授業の創造こそが、豊かな感性を育む授業であるといえるであろう。

道德プロジェクトでは、豊かな感性を育む授業づくりの条件として次の4点を提案し、授業実践への具体化に努めてきている。

- ① 道德の授業に向けての雰囲気づくりが行われていること。
- ② 児童がすでにもっている見方・感じ方を意識化させながら、学習に入ることができること。
- ③ 資料の中の場面に児童が自分の思いや豊かな想像をもって入り込み感じたことを自由に表現できる場を保障されていること。
- ④ 授業の中で追求してきた道德的価値について、授業後も児童の心が豊かにふくらむような終末であること。

【平成5年度研究紀要『豊かな感性を育む』本校刊, 1994】

以下、その実践について述べてみたい。

2 実践事例（平成6年10月17日 校内授業研究より）

(1) 主題・題材 心にひびく思いやり・「とべないホタル」

(2) 主題・題材について

本主題は、学習指導要領の第3学年及び第4学年の内容「主として他の人とのかかわりに関すること。」の(2)「相手のことを思いやり、親切にする。」と(3)「友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。」に該当する内容である。(低学年の内容2の(3)「友達と仲よくし、助け合う。」から発展し、高学年の内容の2の(2)「だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。」に発展する。)

本資料「とべないホタル」は、障害をもつ一匹のホタルの苦しみや喜びを自分の苦しみや喜びとして感じる仲間たちのほのぼのとした、また勇気ある感動的な様子が描かれている。様々な価値を含んだ資料であるが、特に、とべないホタルと仲間のホタルとのかかわりを中心に話し合いを進めたい。

(3) 授業設計の焦点

思いやりや信頼という価値内容を、ただ言葉のやりとりだけで理解させるのではなく、体を動かす活動を通して、他者へのかかわりを意識させ、視聴覚に訴える資料提示によって、共感を深めたい。そのために、心の解放と内容への発展を含んだ導入を工夫したい。また、導入とまとめで同じ行動をとらせることによって、資料への共感をみとりたい。

(4) 本時の目標

相手の心や体を思いやり、助けたり励ましたりしようとする心情を育てる。

(5) 準備物

読み物資料「とべないホタル」(ハート出版)、鉢巻き20本、ペープサート、移動黒板、BGMテープ「心」(宗次郎)、テープレコーダー

(6) 評価の観点

道徳的心情	相手の心や体を思いやり、助けたり励ましたりしようとする行動に共感する。
道徳的判断力	相手の心や体を思いやることの大切さがわかる。
実践意欲・態度	相手の心や体を思いやり、助けたり励ましていこうとする意欲をもつ。

(7) 指導の実際

豊かな感性を育む授業づくりの条件をどのように考え、展開していったのかについて、そのポイントを述べてみたい。

学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 活 動
【ポイント①】	
<p>1 床に寝転がり、拍手の数でグループを作るゲームを行う。 ・四人→三人→二人</p>	<p>1 人数が足りないところは教師も参加する。ゲームによってできた二人組で次のエクスサイズを行う。</p>
【ポイント②】	
<p>2 二人一組で一人が目隠しをし、もう一人は、目隠しした人を釣れて3-2の教室まで行って帰ってくる。 (1) やってみてどうだったか。 ・こわかった。 ・おもしろかった。 ・優しく手を引いてくれて嬉しかった。 ・ちゃんと手を引いてくれなくていやだった。 ・代わってやってみたい。</p>	<p>2 安全とこの活動の目的について、以下の点に留意する。 ○「階段から落とさないよう、人とぶつからないように」とだけ話し、子どものかかわりを観る。 ○目隠しは上履きを履いてから行う。 ○補助的に児童を観察していただくようお願いする。 ○それぞれの立場（手を引く子、引かれる子）の感想を聞き、本時のねらいの伏線とする。 ○子どもの発言に、他者へのかかわりを捉えて評価する。</p>
【ポイント③】	
<p>3 資料「とべないホタル」を読み、とべないホタルの心情、仲間のホタルの心情と行動について話し合う。 (1) このホタルたちの様子やかかわりをどう思うか。 ・とべないホタルはもうひとりぼっちじゃない。 ・代わりに捕まったホタルが帰ってきてよかったな。</p>	<p>3 資料に描かれている道徳的な物語にかかわる状況をつかませる。その際、次の点に留意する。 ○BGMを使いながら、範読する。 ○ペープサートを用い、視覚的にとべないホタルの様子を理解させる。 ○共感的資料として扱い、一人一人の思いを受けとめ、敢えてまとめはしない。 ○様子について意見が出にくい場合、「ホタルたちはどんなお話しをしているんだろう。」と問う。</p>
【ポイント④】	
<p>4 2で行った方法で教室まで帰る。</p>	<p>4 階段等の安全に気を配りながら、子どもの様子から、次の点について観察する。 ○言葉かけ ○間隔のとり方 ○手のつなぎ方 ○階段の下り方</p>

【ポイント①】…雰囲気づくり（条件①）

本授業は、東雲ホール（絨毯が敷いてある、教室2部屋分に相当する広さのプレイルーム）で行った。教室とは違った場の雰囲気による心の解放、寝転がって、リラックスした状態をつくること、子どもたちに「何をするのだろう」という期待感をもたせるためである。

拍手の数で人を集めるゲームも、「主として他の人とのかかわりに関すること」の内容だけに、ゲームを通して友だちとのかかわりを持つ場面を仕組むとともに、展開2へつなぐきっかけとして行った。

<主な指示>

T ぶつからないように座ります。寝転がりましょう。先生が拍手します。拍手の数だけ人を集めます。



【ポイント②】…導入（条件②）

2人1組で目隠し歩き（トラストウォーク）をすることにより、人への思いやりと信頼の大切さを体験することがこのエクササイズの特徴である。しかし、この段階では、道徳的な価値についての説明は行わず、やり方と安全面についてだけ指示した。

<主な指示>

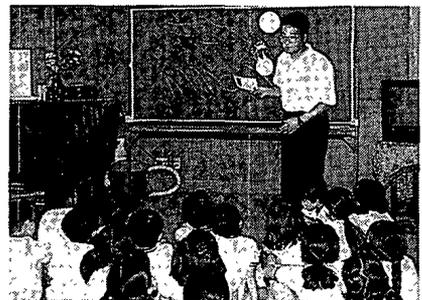
T 今から2人組で一人が目隠しをして、3-2のドアをタッチして来てもらいます。上履きを履いて、廊下でこのはちまきで目隠しをして人とぶつからないように考えながら行って来て下さい。



【ポイント③】…展開前段（条件③）

映画やテレビドラマに気持ちを揺り動かされることがある。迫真の演技やストーリー展開もさることながら、そのバックに流れる音楽に、その場面、そのドラマが強く印象づけられるためであろう。展開する場面とB. G. M. のマッチングは、映画やテレビに限らず、心に響く手だてとして有効であろうと考えた。

そこで、オカリナ奏者宗次郎の「心」をB. G. Mに、ペープサート（とべないホテル）、



チョークによる略画を使って情景描写を行い、教師が読み聞かせる資料提示を行った。また、この資料から感じたことを次のトラストウォークで表現して欲しいという思いから発問も印象を問うだけとした。

【ポイント④】…展開後段（条件③）

最初に行ったトラストウォークとの比較の場面である。最初に目隠しをして相手に引かれているだけに、目隠しをして歩くことの不安またはやさしく接してくれた相手の言動を感じているはずである。

さらに、展開3を通じて資料に共感したならばその行動に変化がみられると仮定した。そしてそれは、相手に対する言葉かけや手のつなぎ方段階のおり方、他のグループとの間隔のあけ方に表れると考え、行動変容をみとる視点とした。



3 考察

本授業を以下に示す仮説に基づいて、分析してみたい。

(1) 授業仮説

授業設計の焦点をふまえ、本授業の仮説を次のように設定した。

体を動かす活動を通して、他者へのかかわりを意識させ、①感覚に訴える資料提示を行い、聞き合うならば、児童は共感性を強められる。②その結果は、トラストウォークの行動変容に見られるであろう。

(2) 分析の視点

- ① 感覚に訴える資料提示や聞き合う場の設定により、共感性を強めることができたか。
- ② トラストウォークの行動に変容がみられたか。

(3) 分析

ここでは、学習の展開上、ポイントとなった①感覚に訴える資料提示と②トラストウォークについて、分析グループによる観察と分析をもとに記述する。

<視点①について>

- 「とべないホテル」と、題を言うと、児童の中には、「知ってるよ。」とか「本も持っている。」という言葉が囁かれた。しかし、B. G. Mが始まると、児童は、じっと教師の方を向いて話に集中した。

- チョークでの略画は、ホタルを際立たせて効果があった。児童のイメージを大切にした提示の仕方だった。
- とべないホタルの心情を語る時、「ぼくの、ぼくの身代わりに…」、「ぼくを、ぼくを助けるために…」と繰り返したり、「大きな涙を流して」を強調したり、身を乗り出して読んだりする工夫がみられた。
- 児童に読み物資料を与えず、教師の語りと提示物での資料提示は、教師の思いを児童が受けとめ、ねらいとする価値に気付くために効果的だった。
- ◎ 児童の様子から、児童の感覚に訴える資料提示であり、資料に対して共感性を強めることができたと考えられる。



<視点②について>

- 展開2でのトラストウォークでは、始まる前からにぎやかであった。歩き出したら、「手をつなぐ」、「肩を抱く」、「手すりを教える」、「声かけ」等、相手を気遣う言動は見られたものの、「階段を走る」、「手を乱暴に引っ張る」、「途中で、目隠しをはずす」等の行為も見られた。
- 資料提示後のトラストウォークでは、全体的に静かな雰囲気であった。言葉かけ…必要な言葉かけを行う児童が増えた。
- 間隔の取り方…目隠しをしている児童がぶつかることが少なくなった。
- 手のつなぎ方…手を持ったり、肩を持ったりしていた。
- 階段の降り方…両方の階段を選択して降りた。最初よりもスムーズにできた。
- ◎ トラストウォークの行動には、変容が見られた。資料提示により共感性が強められたと考えられるが、展開2と4で、それぞれの児童が引く側と引かれる側になっていないことに検討の余地が残る。



4 成果と課題

- 授業設計の焦点のところでも述べたとおり、「主として他の人とのかわりに関すること。」の内容について、体を使って活動することで、頭で「わかっている」ことを具体的な行動を通じて、人とのかわりを実感できたと考える。今後、実際的な場面の中で、他者を意識できる活動の開発をさらに進めていきたい。
- 指導案には記載していないが、教室に帰ってからが終末になった。椅子を引いたり、机の横に置いていた水筒を動かしたりした児童の行為を話しておわったが、少し間をおいて、児童から拍手が起こったことは、豊かな感性を育む道德の授業づくりの条件④を満たしたものと考えられる。
- 資料提示後の発問（「このホタルの様子やかかわりをどう思う？」）は、抽象度が高く、児童に分かりにくかった。発問する前後の言葉を、児童が自然に発言できるような配慮が必要である。例えば、「（最後の場面では）ホタルたちは、どんなお話をしているのかな。…～ちゃんはど
う思う。」と言って指名してもよい。道德は、論理の世界ではないので、児童が自然に発言できる雰囲気づくりを行う必要がある。
- トラストウォークは、2階～3階を使って行った。他クラスの授業のこと、階段等での安全面など、配慮が十分必要である。（本授業では、教育実習期間中であったため、万一に備え、階段付近での観察をお願いしておいた。）

また、めかくしに鉢巻きを用いたが、うまく結べない児童や鉢巻きがずれてくる児童もいたことなど、アイマスク等の利用も考えられた。

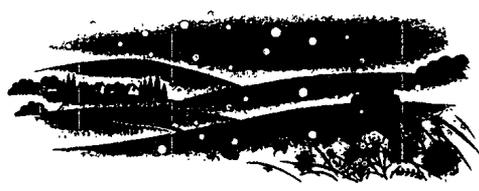
トラストウォークの実施の仕方については、学年の発達、学級の実態を考慮する必要がある。（須山 博充）

読み物資料「とべないホタル」

(出典：「どうとく 4 ゆたかな心で」 東京書籍)



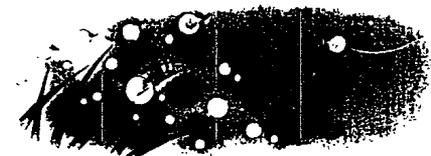
「羽をもっとピンとはってこらん。」
「思わず、見ていたほたるの一びきが言いました。
「ほら、そこで足を引っこめて。」
ほかのほたるたちも、ロウにはげました。
でも、やっぱりだめでした。とべないほたるは、くやし
く、あたりをのめちやめちやに歩き、石に体をぶつけましたが、
見ているほたるたちはどうすることもできません。とべない
ほたるはつかれて、石の上にはわりこんでしまいました。
明るい月夜のことでした。とべないほたるは、ねこやなぎのえだにのぼって、
ぼんやりと真ん丸いお月さまをながめていました。
ときどき、すうっすうっとうと光の糸を引いて、ほかのほたるたちか目の前をと
んでいきます。とべないほたるは、悲しい目でそれに見送っていました。
そのときです。うしろで、とつぜん、人の大きな声がありました。
「あら、まさちゃん、あなたの背の上にはほたるがおりてきたわ。」
とべないほたるがおどろいて、ふり返ってみると、すぐそばに、小さな男の子



7 とべないほたる

西の空が夕日にそまって、町も田んぼも金色にかがやきました。ほたるの子どもたちは、いつせいにさなぎからかえりました。
「ああ、今日から、ぼくも一人前のほたるだ。うんとうんと光るぞ。」
「わたしもよ、やっどほたるになれたわ。」
まだやわらかい羽をいっばいに広げて、むちゅうとどび回りました。しばらくして、ふと下を見おろすと、今どびたつてきた草むらのあたりに、ただ一つ、ぼっかりと輝く光のこつているてはありませんか。
「おうい、だれがいるの。上がっておいでよ。」
「とべないんだよう。空に上がれないんだよう。」
下からは、とても響くような声で、そう返ってきました。
すうっ、すうっ、空のほたるたちは、見いておどろいてきました。そこには、黒い羽がやけどをしたように、じじ





ほたるたちのこんな話し声が聞こえてきました。
「ぼくが先に出ていこうと思つていたところだったんだ。」
「わたしもよ、わたしも行きたかったわ。」
とべないほたるは、なみだでいっばいになった目で、みんなをいつまでも見送っていました。
しばらくすると、とらえられたあのほたるが帰ってくるという知らせがどとききました。子どもたちは、病気でねている友だちにはほたるを見せたあと、庭に放してくれたのです。
そして、もうそのころには、とべないほたるも決して「一人ぼっちではありませんでした。みんなと、いっしょに、あのほたるをむかえる用意をするために、せつせとかけて回っていました。」
(小説「とべないホタル」による)



が立っています。そして、なんと、その子の背に、一びきのほたるがとまっています。ではありませんか。
「へんだなあ。ぼくがね、あのねこやなぎにとまっていたほたるをつかまえてしまったらね、このほたる、空からさあつとまいおりてきて、ぼくの背にとまっちゃんだよ。」
「おかしなほたるね。どうしたんでしょう。でも、帰っていきましようよ。」
このとき、とべないほたるは、じいんと体がしびれたようになつて、動けなくなつてしまいました。
「あのほたるは、ぼくの背がわりになつてくれたんだ。ぼくを助けるために、わざとつかまってくれたんだ。」
とべないほたるは、大きな涙をこぼしました。ないて、何度も何度も同じことをさげびながら、あたりを駆け回りました。
二人の子どもたちは、向こうのあせ道を帰っていきます。
空には、いつの間にか、数十びきのほたるたちが集まっていました。どのほたるたちもみな、先ほどの様子を見ていたのです。

